

江戸時代の刊行国絵図について

日笠 咲世子

絵図とは絵画的・鳥瞰図的表現によって地物を表現した地図のことである。さらに、絵図の中でも旧国と旧郡の区画によって一国を描いた絵図のことを「国絵図」と呼ぶ。江戸時代に作成された国絵図には江戸幕府が諸国から徴収し編纂した江戸幕府撰国絵図がある。そして、出版された国絵図である刊行国絵図には、この江戸幕府撰国絵図を基にして作成されたと推定されるものも数多く存在する。しかし、幕府撰国絵図と刊行国絵図との関連性についてだけでなく、刊行国絵図についての研究自体ほとんど行われていない。

そこで、江戸時代に出版された刊行国絵図の出版、利用の実態を明らかにするため、本研究では公的機関等で所蔵されている江戸時代の刊行国絵図を対象としてデータ分析をおこなった。作成した刊行国絵図のデータは712件となり、その内同一のものを除いたところ312件となった。このデータを用いて分析、検討を行った。

刊行国絵図に表された国は近畿から東日本を中心とし、全国68カ国中44カ国に及んだ。その一方で、西日本諸国を中心とする国々では刊行国絵図はほとんど見られなかった。刊行国絵図が数多く作成された国について見てみると、多くの国において、国内での人々の行き来、又は他国からたくさんの人々が訪れる場所や機会が存在していた。また、出版が行われていなかった国の中には、国内の情報を漏らさないため領内への人の出入りを制限していたと言われる国があることから、その国へ訪れる機会の有無が刊行国絵図作成の大きな要因となり、需要を生み出したとも考えられる。

国絵図の出版はこれまでの研究どおり、1709年の河内国絵図からはじまった。出版点数は1771年から1780年の間と、1821年以降に大きく増加した。そして出版が行われた地域は、初期は畿内を中心として出版されたが、しだいに全国へと広がっていった。特に、1821年以降は江戸の版元が刊行国絵図を出版するようになり、さらに地方の版元と三都の版元による共同出版が行われるようになった。このことより、この時期には国絵図出版が流行していたと推定できる。

刊行国絵図の役割には大きく分けて3つあると考えられる。1つ目は旅行などの際に携行し必要に応じて閲覧する、地図としての役割。2つ目は旅をすることができない人が国絵図を眺め、遠く離れた地に対して思いを馳せ、絵図上で旅を楽しむ、名所記としての役割。3つ目はその地に住む人々もしくは他国の人間に、その国にどのような歴史や由緒があったのかを表す、地誌や郷土誌としての役割である。これらの3つの役割が中心となって江戸時代の刊行国絵図は作成、利用されていったと考えられる。

(指導教員 白井哲哉)